



写真 平成19年度石川県教育工学研究会総会(5月27日)より

題字・デザイン 吉田貞介氏

石川県教育工学研究会

2007.7.17

第73号

## 新しいことに挑戦する気持ちを忘れずに

金沢市立米丸小学校長 三田村 英明

石川県教育工学研究会に所属して、長い年月が経ちました。これまで、研究会を通してたくさんの方々の先導や若い方々から教をいただくと共に、たくさんの方々の刺激をいただいたことに深く感謝しています。現在、私は校長として職員の皆さんに「新しいことに果敢に挑戦すること」をお願いし、大きな期待を寄せています。既存の指導方法を繰り返すだけでなく、常に新しく挑戦する姿勢を持つことにより、より高いところをめざすことが大切だと考えているからです。私にとってこのことが石川県教育工学研究会で学んだことではないかと考えています。今でも春の研究会に参加し、若い方々の素晴らしい教育実践と意欲にふれる度に大きな刺激を受けています。また、他に言うだけでなく、自分に対する戒めでもあります。校長として学校経営を進める上で、常に心がけているところです。

開かれた学校づくりの一環として、ホームページに校長ブログを書き始めて、2年が経とうと

しています。ホームページ担当者が日々奮闘している姿を見て、「自分に何が出来るのだろうか」という思いがきっかけでした。「継続は力なり」と言われますが、続ける中で新しい発見もあります。これまで何気なく見ていたものが違った見方で見えてくることもあります。この4月に学校は変わりましたが、「新・みたむら日記」として継続中です。一度お訪ねください。

今、本校では関西大学の水越敏行先生、金沢学院大学の吉田貞介先生のお誘いで、「デジタル画像を活用した国際交流」をテーマにミュンヘン日本人国際学校との児童の交流を始めようとしています。新しい取り組みの中で本校の子どもを鍛えることを期待するとともに、関西大学との共同研究での新しい出会いや発見があるはずと楽しみにしているところです。石川県教育工学研究会に参加する若い先生方に、「新しいことに、果敢に挑戦する気持ち」をこれからも大いに期待をしています。



















## 金沢支部で取り組む 国際交流「アートマイルプロジェクト」

石川県教育センター 清水和久

### 1. アートマイルプロジェクトとは？

Jearn（国際教育ネットワーク）のプロジェクトの1つとして、JAM（ジャパンアートマイル）のプロジェクトがあります。このプロジェクトは絵を通しての国際交流をめざしており、2カ国で1枚の巨大壁画（高さ1.5m、幅3.5m）を描きます。なお、この絵はピラミッドを囲む形で2010年にエジプトで展示される予定です。

### 2. 国際交流に取り組んできた実践実績

金沢支部は、ここ数年、国際交流の実践に取り組んできました。

2004年度に大徳小学校6年（清水教諭）、浅野川小学校5年（細川教諭）が、GVC（Global virtual classroom）に参加。小学校部門で金沢市立大徳小学校が3位に入賞。浅野川小は敢闘賞を受賞。このGVCとは3つの国の子ども達が共同でWEBページを作成するコンテストであり、各グループでテーマを決めおよそ半年でWebページを完成させるものである。

2005年度 扇台小学校6年生（濱田教諭）がGVCに参加。台湾とカナダの子ども達と協働でWEBを作成。小学校の部門で第3位に入賞。

2006年度 扇台小学校6年生（坂上教諭）がアートマイルプロジェクトに参加。関西大学の支援のもと、シリアのパレスティナ難民キャンプの小学生と共同で3枚の壁画を完成させた。

このように、ゴールとしてGVCは共同でWEBを作成すること、アートマイルは共同で絵を作成することねらいとしている。両者は作成するもの（媒介）が違うだけで、実際には、その協働作成の作業を通して、相手の文化を学んだり、自国の文化を紹介したり、互いの文化を比較することができるプロジェクトである。

### 3. アートマイルプロジェクトへの参加

今年度は、金沢大学教育学部附属小学校5年

3クラス、金沢市立扇台小学校6年3クラス、金沢市立夕日寺小学校6年2クラス、内灘町立西荒屋小学校5年1クラスで、アートマイルプロジェクトに参加します。

#### (1) 今年度の計画

	支部の動き	各校の動き
6月	学習会・交流校の決定	JERAN・JAMへの加入
7月	TV会議の練習	各校コンテンツの準備
9月	ビデオ編集研修	交流の開始・自己紹介
10月	交流ノウハウの交換	アートマイルの開始
11月	国内交流の相談。	絵の作成・人形の交換
12月	講演会2・中間報告会	TV会議等、絵の完成
1月	国内交流	交流校へ絵を送る
2月	研究のまとめ	交流校より絵の返却
3月	石川県教育工学研究会発表会	完成した絵の鑑賞

#### (2) ねらい

##### ① 実践的英語活動

英語活動で習っている表現を交流校とのTV会議で実際に使い、思いが通じる経験を持つ。

##### ② 自国の文化の発信と比較

絵で自国のことを表現するためには、まず自分自身で地域や国の特色などを調べる必要があるので。ので、うまくデジタル情報としてためて、発信に利用する。

##### ③ 協働作業の実体験

国境を越えて協働で作業することで達成感や一体感を持つことができる。

### 4. 今後の展開

9月から本格的に交流がスタートする。全国のアートマイルプロジェクト参加校も含めると全部で15校あまりの学校が参加することになる。国内校同士の交流も含め、先生自身もワクワクするような交流ができればと考えている。



## 能登地区からの発信

七尾市立德田小学校 岩崎京子

### 1. はじめに

昨年度、七尾市田鶴浜を会場に県視聴覚研究大会七尾鹿島大会が行なわれました。田鶴浜小中学校等の授業公開や分科会、講演会においては、多くの会員の方々のご参加をいただきました。また私自身、田鶴浜小学校の校内研修や珠洲での県視聴覚夏季セミナー、羽咋市視聴覚部会学習会など多数の会に参加させていただきながら、能登地区でのIT活用が一步一步確実に広まるとともに深まっていることを強く感じてきました。

### 2. 今年度の活動予定

#### (1) 「PISA 型読解力」学習会

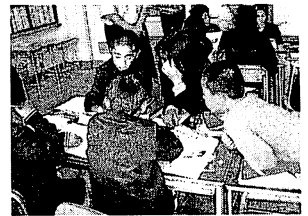
「PISA 型読解力」という声が近くの先生方や学校からも聞かれるようになってきています。先生方のまわりでも少し大きくなってきてはいないでしょうか。今年度の徳田小学校の学校研究も読解力の向上を中心に取り組み始めています。5月始めには、徳田小学校と高階小学校の先生方を中心にPISA 型読解力の学習会を行いました。講師の金沢星稜大学村井万寿夫先生からは、読解力の7つの視点や各教科における実践例等をわかりやすくご講義いただきました。今後は、さらに多くの先生方に参加していただける形で、第2回目の学習会の開催を計画中です。学習会では、読解力をテーマにした授業実践の交流なども企画していく予定です。ご関心がありましたら、是非徳田小学校（岩崎）までご連絡ください。

<読解力向上に関する授業実践より>

#### ○第5学年算数「小数のわり算」

あまりがある場合の小数点の位置について考える授業で、読解力向上を意識した実践を行なった。子どもに身に付けさせたい読解力は、読解力向上に関する指導資料（平成17年12月文部科学省）の中の『(ア)目的に応じて理解し、解釈する力』であり、具体的には「生活や体験と結

びつけながらテキストを理解し、計算の結果から適切な答えについて考え判断する力」である。身近な生活と関連させたマドレーヌ作りのレシピをテキストにして、「家にある材料で何個分作ることができるか」や「あと1個多く作るには小麦粉が何g必要か」を考えさせた授業である。レシピの中から材料と分量を読み取り、それぞれ何個なら作れるのかを考えながら、一番少ない小麦粉をもとに最低9個はできると判断していた。



#### ○第6学年算数「平均」

平均について学習したことを生かし、自分なりの考えとその理由を発表しあう中で、(イ)テキストを利用して自分の考えを表現する力の向上を意識した実践である。水泳大会のリレー選手4名を決める監督として、6名の選手のタイム（2週間前、1週間前、大会前日）をもとに、自分なりの考えを持たせた。選手に向かって監督になったつもりで、選手の発表や理由の説明をする中で、平均タイムや前日のタイム、ベストタイムをもとに説明することができた。

#### (2) 県視聴覚研究大会珠洲大会

第48回大会が11月21日(木)に開催され、本会の会員である山下匡先生が分科会発表されます。5年社会科におけるデジタル教材を活用した実践報告をされる予定です。

大会に参加される方は、是非、山下匡先生が発表される分科会にご参加ください。

### 3. 終わりに

本会会員の能登地区の先生方と直接お会いできる機会はなかなかありませんが、それぞれの学校において行っている実践を交流しあえる場が少しでも増えていけばよいと思っています。

## 授業設計の基礎理論を踏まえた、校内授業研究のすすめ

石川県教育工学研究会 会長 岡部 昌樹

総会後の学習会において、ID 理論（ID プロセスモデル）と教育工学における授業設計の位相、及び教育工学における狭義の授業設計における今日的な課題について学習会を行った。

### 1. インストラクショナル・デザインとは…

インストラクショナル・デザイン（ID プロセスモデル）の一般形として知られる ADDIE モデルは、分析(Analysis)、設計(Design)、開発(Development)、実施(Implementation)、評価(Evaluation)の頭文字をとったものである。

ADDIE モデルは、システムのアプローチ（計画:Plan、実行:Do、評価・判定:see のサイクルを複数回まわすことで、システムの性能を向上させるというモデル）を背景に提案されたものである。ADDIE の各ステップを順番に進んでいくと、一度でよい ID ができるということを示しているわけではないことに注意が必要である。つまり、ADDIE モデルのステップの他に、「必要に応じて改善」という目立たない要素が盛り込まれている。これが、システムのアプローチにおける「フィードバックと自己修正」のループであり、何度も試行錯誤を重ねてより良いものにしていくことが前提とされている。システムのアプローチにおいては、P-D-S のサイクルを何度も回して改善をしていくため、S（評価）は最後に行われるものではない。必要に応じて状況を評価し、不足していることを補い、悪い面は改善していくための情報収集が常に行われる。教材レベルに焦点化した初心者向け ID プロセスモデルとしては、Dick & Care のモデルが最も多用されている。

このモデルは、ADDIE モデルの分析過程を最小限にとどめ、「学習目標が与えられたときに教材を用意する」という場面、すなわち短期間で終了するコース（または教材）レベルの設

計を念頭に提案されたものである。システムレベルの設計を行う上級 ID 者ではなく、比較的短期間のコース向けの教材や集合研修を担う初級 TD 者の育成を念頭に、専門家要請の初期段階に用いられているのが特徴である。Dick & Carey モデルでは、まず、研修目的（教育目標）と研修開始時に学習者ができること（前行動）が確認され、そのギャップを効果的にうめるために教材設計が行われる。次に最も効果的とされている学習目標の順序だてや各日標に対する教授方略をデザインする。次に教材設計案に基づいて教材を開発し、その教材が実際に効果的かどうかを形成的評価の過程を通して確かめる。形成的評価から得られたデータは教材の改善、あるいは理論的な前提の再検討に用いられ、学習効果がさらに確認される。最終的には、教材の改善の必要性がなくなった時に、総括的評価が行われ、システムのプロセスを終結することになる。ID プロセスの学問的根拠は、まさにこのシステムのアプローチにあるといえる。

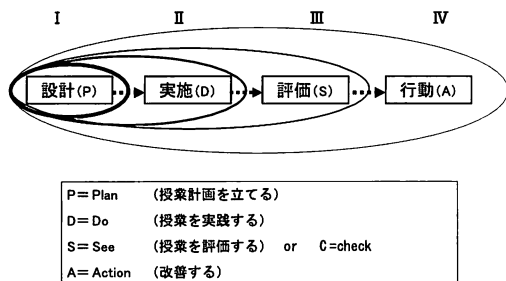
### 2. ID 理論から教育工学が学ぶこと。

ID 理論（プロセス）は、教育工学の定義に類似している。Seels & Richey の教育工学の定義では、【教育工学とは、学習の過程と資源についての設計、運用、管理、ならびに評価に関する理論と実践である。（1994）】。そこでの学習の（プロセス）と資源（リソース）については、学習成果を上げるための一連の手続きや活動（過程）とそれを支えるすべての材料（資源）だと捉えられている。プロセスには、搬送システム、教授スタイル、教材開発モデルなどが含まれる。リソースは、支援システムや教材、あるいは学習環境を含む広範な概念であり、学習指導に用いられる教材や教具のみならず、人的資源、予算、設備などの利用可能なもの全て

を包含すると捉えられている。教授は手段であり、目標とするのは知識、技能、態度などの変化として根拠づけられる学習の成果であるとの立場が強調されている。また、工学という語は、学習の成果をいかにあげるかという問題を解決するための学問という意味で用いられている。研究領域の一つに「設計」が含まれている。ADDIE プロセスモデルも同様にプロセスの一部に「設計」が含まれ、デザインを一つの要素として含む全体をIDプロセスと呼ぶ“入れ子状態”となっている。このことが教育工学における授業設計との混雑を招いている。しかし、教育工学は、ID理論から学ぶべきことが多い。

### 3. 教育工学における広義の授業設計と課題

広義の授業設計の基本的プロセス(P→D→S→A)



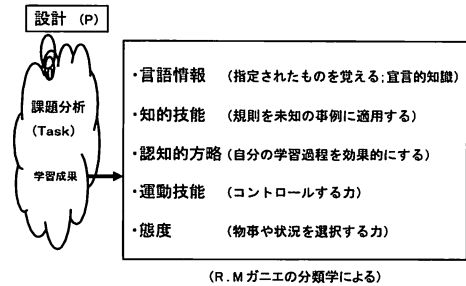
教育工学における授業設計の考え方が校内授業研究でも取り入れられるようになった。しかし、I～IVの段階においてフィードバック機能が十分に機能しているとはいえない。Iにおいては、課題分析が不十分なため、目標が行動化されていない場合が多い。IIにおいては、KR情報の分析がほとんどなされていない。そのため、Iの時系列分析に戻す情報が不足している。IIIの課題は、Iにおける課題分析の曖昧さと目標の非具体性に起因している。さらに、形成的評価が形式化している。IVの課題は、成果の説明責任が即座に問われないため、Iにフィードバックすることが少ない。最低、改善案を再提示すべきである。

### 4. 教育工学における狭義の授業設計課題

学習課題を分析する手法は(クラスター分析、階層分析等)、これまで数多く提案されてきたが、学習成果の視点から課題を分析すること

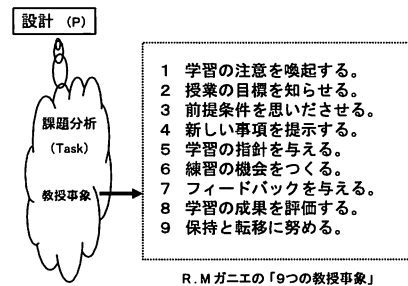
も必要である。指導案の中には、言語的情報と認知的方略の区別の曖昧なもの、知的技能と運動技能の区別が曖昧なものが目立つ。ガニエの分類学を再考してみる必要がある(到達度の測定方法が当然異なることが再認識できる。)

課題(学習成果)の5分類



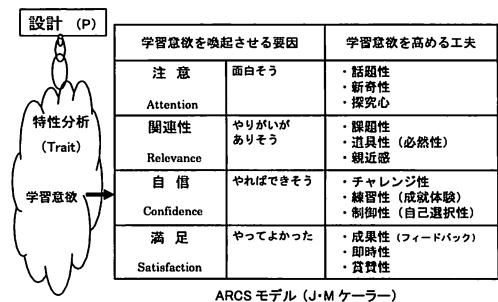
ガニエの9教授事象は、学習の情報処理モデルについての基本的・効果的な学びのプロセスを示したものに過ぎない。しかし、計画した教授活動をチェックするためには有用である。

学習プロセスを支援する有用な教授事象



「期待×価値理論」を継承したケーラーのA(興味)R(関連)C(自信)S(満足)モデル(4要因)は、境界や順序性は必ずしも明快ではない。しかし、学習意欲を工夫する際のヒント・可能性を与えてくれる。

設計プロセスを支援する動機付けモデル



# メディア教育振興会プロジェクトの動き

## — メディア等を利用した PISA 型読解力を視点に持った学習展開事例の研究 —

メディア教育振興会会長・金沢星稜大学 村井 万寿夫

### 1. はじめに

今年度よりメディア教育振興会の会長をさせていただくことになりました。前会長の中川一史先生、元会長の岡部昌樹先生、黒上晴夫先生、吉田貞介先生のような器ではありませんので、皆様のお力添えをいただきながら、任の全うに努めていきたいと思っております。どうぞ、よろしく願いいたします。

### 2. メディア教育振興会の変遷

吉田会長の時代には、授業に活用する教材のコンテストを行っていました。主として、ビデオ教材部門とコンピュータ教材部門で顕著な教材を表彰し、メディア教育の振興に資してきました。

黒上会長の時代になってからは、メディア等を活用した授業実践の論文コンテストに模様替えしました。

第1回論文コンテストは平成10年度に行われ、26件の実践論文の応募がありました。

このコンテストは岡部会長、中川会長の時代へと継承され、平成17年度まで続きました。

平成18年度になると、これまでのコンテスト形式から実践研究に模様替えすることになりました。その具体的な形が「メディア等を利用した PISA 型読解力を視点に持った学習展開事例の研究」です。

プロジェクトは18年度末に立ち上がり、本年度からプロジェクト研究が始まりました。

研究初年度は、PISA 型読解力についての理解と授業実践に主眼を置いています。

### 3. プロジェクトの目的

- (1) メディア等を利用して PISA 型読解力を高めるための授業についての学習会を行う。
- (2) メディア等を利用して PISA 型読解力を高

めるための授業を設計・実施し、より多くの学習展開事例を整理してまとめる。

### 4. プロジェクトの研究経過

3月の第1回会議でメンバーが集まり、顔合わせと PISA 型読解力公開研究会（会場：横浜国大附属中学校）の視察報告を行い、PISA 型読解力についての基本的な確認を行いました。

4月の第2回会議では、研究の進め方を確認、読解力についての学習会、実践授業の指導案形式の検討を行いました。

5月の第3回会議において、前回会議で検討した共通形式による指導案が提案され、プロジェクトメンバーがどのような「PISA 型授業」を考えているかについて、共通確認することができました。

6月の第4回会議では、授業実践が終わった4本のレポートがあり、どのように PISA 型読解力をめざしたのかについて、意見交換をしました。また、社会科での「読解力」の捉え方や育て方について、教科調査官の講演資料をもとに学習会を行いました。

7月の第5回会議では、次に授業実践が終わったレポートを行ったり、8月の読解力セミナーについての計画を確認したりしました。

読解力セミナーは下記のようなことを計画しています。

期 日：平成19年8月25日（土）
時 間：13：00～17：00
会 場：野々市町役場情報交流館カメラア
テーマ：「どうつくる PISA 型授業」
内 容：分科会（国語・社会・算数・理科）
全体会・パネルディスカッション

※詳細については17ページを参照

## 5. これまで話し合ったこと

### (1) 読解力向上をめざす授業改善の取組

文部科学省が平成17年12月に発行した「読解力向上に関する指導資料」（以下指導資料）においては、次の3つが示されている。

- ◇テキストを理解・評価しながら読む能力を高めること
- ◇テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること
- ◇様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること

### (2) 読解プロセスについて

上記のことを授業の中で考えてみると、「テキストから情報を取り出し、解釈し、熟考し、自分の意見を論ずること」を内容とする読解プロセスが見えてくる。

### (3) 読解力の具体的な指導項目

指導資料（前掲）をもとに、次のように3観点7項目から捉える。

ア テキストを理解・評価しながら読む力を高める指導

- ㍑ 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成
- ㍒ 評価しながら読む能力の育成
- ㍓ 課題に即応した読む能力の育成
- イ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める指導

㍑ テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成

㍒ 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成

ウ 多様な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実する指導

- ㍑ 多様なテキストに対応した読む能力の育成
- ㍒ 感じたこと考えたことを簡潔に表現する能力の育成

### (4) テキストの捉え

文学的テキストや説明的テキストなどの「連続型テキスト」だけでなく、図、グラフ、表、写真などの「非連続型テキスト」を含む。

### (5) 授業設計のポイント

読解力の具体的な指導項目である3観点7項

目をもとに、単元のねらいや児童生徒の実態、教師の願いなどから、授業改善の方向（3観点7項目のどれをめざすか）を定める。

次に、授業改善の方向が単元レベルのどこに位置づくのか、さらに、本時レベルではどのようなねらいを達成するためにどのようなテキスト（連続型テキスト・非連続型テキスト）を用いて、どのような学習内容で行うのかについて検討する。

その際、指導資料に掲載されている指導例の形式をもとに授業案形式に仕上げていく。

これによって、授業イメージを一般化したり、共通理解したりすることができるようにする。さらに、その授業案を当会のWebサイトで公開することにより、閲覧者の理解度を高めることに役立つ。

各授業案と実践時期は下記のURLで閲覧することができます。

<http://media2007.sakura.ne.jp/>

実際に授業を行う際には、メンバーの所属する学校の指導案形式に準拠しながら、授業者が考える読解力向上のための指導の手立てを明確にする。

これによって、当該学校における授業研究の推進に寄与できることになる。また、授業実施後には、授業の振り返りの項目を加えることにより、プロジェクト内でのレポートに活かすことができるようになる。

### (6) メディア等の活用のポイント

メディアの定義はいろいろあるが、本研究においては、メディア＝媒体を基本とする。

指導案の中においてはメディアの名前ではなく、「写真で」「グラフで」「文章で」「話で」などと表現する。

そして、例えば、「グラフで」日本の漁獲高の移り変わりを読み取りながら自分の考えを持つ場合、社会科資料集（紙媒体）がよいのか、コンピュータとプロジェクター（電子媒体）がよいのか検討しながら、メディア決定する。



## 第8回金沢大学 教育実践総合センターセミナー

# 「どうつくる？PISA型読解力育成授業」

**日時** 2007年8月25日(土)  
13:30~16:30(受付13:00)  
**会場** 野々市町情報交流館「カメリア」2階  
野々市町役場に併設 <http://www.e-canellia.jp/canellia/>  
住所 石川県野々市町字三納18街区1番

### 1. 全体会 13:30 ~ 13:45

あいさつ 村井万寿夫(石川県教育工学研究会副会長・金沢星稜大学)  
趣旨説明 細川都司恵(金沢・夕日寺小)  
全体司会 清水 和久(石川県教育センター)

### 2. グループセッション 13:45~14:55

◎第1分科会

司会 中條 敏江(白山・東明小)  
発表(国語)西田 素子(金沢・長田町小)「読みの学習を書くことに生かした説明文での読解指導」  
発表(社会)濱田美恵子(金沢・扇台小)「多様なテキストの読み取り」

◎第2分科会

司会 八崎 和美(金沢・附属小)  
発表(理科)平木 貴裕(金沢・夕日寺小)「評価しながら読む能力の育成」  
発表(算数)岩崎 京子(七尾・徳田小)「算数科で取り組む『読む力』『考える力』の育成」

### 3. パネルディスカッション 15:10~16:20

「PISA型読解力に関わる授業研究の動向について」

コーディネーター 加藤 隆弘(金沢大学 教育実践総合センター)  
パネリスト 中川 一史(メディア教育開発センター)  
村井万寿夫(金沢星稜大学)

### 4. 閉会式 16:20~16:30

あいさつ 松原道男(金沢大学教育学部附属教育実践センター長)

主催 金沢大学教育学部附属教育総合実践センター  
共催 石川県教育工学研究会・メディア教育振興会 後援 石川県教育委員会(申請中)  
問い合わせ 金沢大学教育学部附属教育実践総合センター TEL 076-264-5588  
URL <http://i-kougaku.undo.jp/>

## 全国学力テスト分析会レポート

金沢市立大徳小学校 飯田 淳一

7月5日(木) 19:00から富樫プラザ221研修室で、研究部主催の全国学力テストを分析する会が行われた。平日の夜の会にも関わらず16名の参加があり、活発な意見交換が行われた。

### 1. 会の趣旨について

平成19年4月24日に実施された全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）の問題からこれまでの指導を考え直し、今後の指導の改善点を探る。

### 2. 会の流れ



まず研究部長細川先生から全国学力テストの概要等を聞いた後、国語2グループと算数グループに分かれ、実際の問題を解いてみた。い

ずれもB（活用）の問題で、国語は学級会の話し合いの問題（1番）とゴミの問題（2番）、算数はケーキの問題（4番）を中心に解き、感想を交流した。



問題を解く参加者

その後、またグループで、これまでどんな学習が足りなかったか、今後どんな授業をしていけばよいかを話し合い、最後に発表して全体で共有した。そして星稜大学村井先生から総括をいただいて、今後の方向性を確認した。

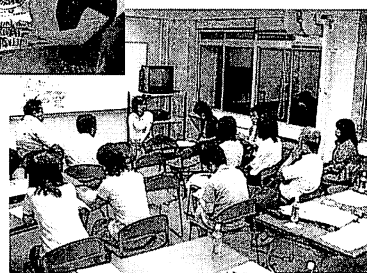
### 3. 実際に解いてみての感想より

- ・特に活用BはPISA型読解力をかなり意識した問題である。
- ・従来の国語のテストとは大分違う。市販テストに慣れていては書けない。

- ・何の力を測ろうとしているのか、見極めることが必要。
- ・生活経験や学習経験で差がつきそう。
- ・文章の量が多い。挫折する子も多いのでは。
- ・簡潔にまとめる力、表現力が求められる。
- ・情報量が多いので情報の取り出しが難しい。
- ・多くの条件があり、広範囲に見る力が必要。



グループ討議の結果発表



全体の様子

### 4. 今後に向けて

- ・長文に負けないように読書量を確保したい。
  - ・国語こそ少人数で力をつけさせたい。
  - ・国語でも低学年からの積み上げが大事。
  - ・語彙力をつけたり表現力をつけるためのスモールステップを明らかにしていきたい。
  - ・従来からの指導法を見直し、軽く扱う単元がないように単元計画を考え直す。
  - ・他教科との関連や生活経験・学習経験が結びつく授業設計を意識していく。
  - ・ねらいが子どものものになっているかの分析から課題を見直すことがカギである。
  - ・もう一度、学校の中で全職員が意識を共有して、組織の力として取り組む必要がある。
- 以上を総括すると、①個のスキルアップのための指導法を明らかにすること、②目標分析から課題づくりと授業設計を考えること、最後に③全職員で意識を共有することが大切であることが確認できたように思う。

## 児童と教師の読解力育成

白山市立東明小学校 中條 敏江

### 1. 読解力

今年度の学校研究は、読解力をキーワードにしている学校が多いように思います。国語科だけでなく、PISA 型読解力を意識して他教科にわたる読解力育成を意図している学校も少なくありません。

文部科学省の読解力向上プログラムが出されて2年がたち、PISA 型読解力が広く理解されてきたことがわかります。指導要領や教科書をPISA 型読解力の視点で見ると、多教科にわたるあらゆる場面で、情報の取り出し、解釈、熟考・評価の能力が必要とされたり育てたりする単元となっています。また、読書の習慣や様々な資料を読むことやそれに対する意見を伝え合うことは、その基盤として重要であることは、誰もが了解しています。

### 2. 「Ichigo 読書」での読み方の変化

「Ichigo 読書」は、白山支部で2年続いている集団読書の方法です。教育書・ビジネス書を参加メンバーが持ち寄り、15分間読み、それぞれ3分間のアウトプットに質疑が2分を繰り返します。

1冊の本を15分で読むわけですから、当然全てを読むことは出来ません。本人が興味のあるところを読み、自分の解釈で伝えるわけです。たぶん、普段の生活でも物語を読むとき以外は、全文を読まず欲しいところだけを読んで情報を得ることの方が多いと思います。

初めのうちは、試行錯誤で読んだり伝えたりしていたのが、他の人の読み方やまとめ方、伝え方を参考に工夫するようになりました。たいへん、「はじめに」や「おわりに」、もくじなどで全体像を掴み、次に関心があるところを中心に読んでいきます。

教育書中心ですから、同じような本あるいは相対する考えの本もあります。そのため、著者がどんな立場の人であるかを押さえることがとても大事なことであるかがよく分かってきました。そして、それを意識して解釈し伝えます。また、その内容に関しても納得できないことや賛成しかねる場合も多くあります。そのため、伝える3分は、読んだことに対して自分の考え

を付け足したり評価したりすることになります。斉藤孝と佐藤学の本がよく出されたころは、2人の特徴が明確になり、先月の内容と結びつけることも少なくありませんでした。だんだん、読むときから伝えることを意識して、見通しをもって読むようになりました。

また、その後の2分では、実際の指導場面につなげた意見や多様な視点からの意見が出て、まさに視野の広いところでテキストをもとに考え合うことになりました。そのため、2分では終わりません。

このように、「Ichigo 読書」は、PISA 型読解力や読解力向上プログラムを児童の立場で経験していることになります。そして、PISA 型読解力の大切さを、身をもって理解するとともに、少しは自分自身にも読解力が身についたように思います。

そして、最近話題の大人の読解力に集中力や速読がキーワードにあることにも納得がいきました。

### 3. 児童生徒の読解力育成につなげる

読んでまとめて伝える経験から得たことはたくさんありますが、大枠を捉えることとクリティカルシンキングの重要性はこれからの情報社会を生きていく児童生徒には、特に身につけて欲しいことです。

国語の説明文指導では、最近は大枠を掴むこと、つまり詳細なことの前に文章構成や要旨を早めに掴む指導が要求されるようになってきました。しかし、教科書には著者の紹介もありませんし、前書きももくじもありません。著者の紹介を教師が補ったり、別の機会に「もくじ」や「前書き」などを読んだりすることを教えていく必要があると感じました。

また、書いてある内容や表現方法について、いつも能動的に考える習慣をつけることは、実際大人が現在行っていることです。そして、さらに未来を担う子どもたちにはより必要な態度形成であると確信しました。

みなさんも学校や研究会で「Ichigo 読書」してみませんか。

## 情報社会に向けて価値ある学びを見える形に

東北学院大学教養学部 稲垣 忠

### 1. メディア活用と学びの方向性

新しいメディアやテクノロジーが登場する度、その教育活用の可能性が検討されてきた。ほぼ全国の学校が接続したインターネットは、子どもたちの調査、交流、発信の道具として定着しつつあるが、家庭利用が先行した携帯電話は、もっぱら安全教育の対象として取上げられている。デジタルカメラを見かけない学校は今では考えられないが、電子黒板のように教育効果が期待されながら足踏みを続けるメディアもある。

メディアには、従来の学習環境では実現し得ない新たな学びを生み出す可能性があるものと、学習環境の一部を置き換え、学習の効果・効率を高めるのに資するものがある。筆者自身メディアの教育利用を検討する研究に従事し、素晴らしい授業実践を拝見する機会に恵まれてきた。そこでの教師の創造性や子どもたちの頑張りには水を差すつもりは毛頭ないが、それでも時折こんなことを考える。情報社会で変わりゆく「知」「情報」「学び」に対して、子どもたちに真に経験してほしい価値ある学びとは何か、そのために欠かせないメディアとは何か、それらと学校教育の現状との距離はどの程度で、現時点でできることは何だろうか。

### 2. 教育工学的なアプローチ

様々な教育課題に対し、解決のための具体的な道具や方法を開発、実証することが教育学の役割である。マイナスの状況をゼロに修復する問題解決だけでなく、プラス＝より良い教育効果を求める、未来志向の問題解決も含まれる。

先程の問いに答えるには、情報社会の問題への対処や、新奇なメディアの可能性を試すだけでは十分ではないだろう。来るべき情報社会の学習観を見据え、メディアを活用した教育実践の中から多くの価値ある学びを実現する知見を整理し、方策として組み上げ実証することが重要と考える。

### 3. 学校間交流学習の課題と可能性

ネットワークを使って他校の児童生徒と交流する学校間交流学習に着目した研究に継続して取り組んでいる。主体的な情報活用、コミュニケーション能力の育成、異文化・自文化理解の促進などの効果が期待できる。OECDによるDeSeCo（コンピテンシーの定義と選択）では、1)社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、2)多様な社会グループにおける人間関係形成能力、3)自律的に行動する能力、をキー・コンピテンシーとして定義した。学校間交流学習は、インターネットがあってこそ可能な実践であり、ここに掲げた能力の育成に資する指導法であると確信している。

そうは言うものの、相手校探し、掲示板やテレビ会議システムなどのツールの活用、スケジュール調整など交流学習の実践には多くの課題があり、大げさなイメージもつきまとう。そこで、先進的な実践者の知見と構成主義的な学習論をもとに授業設計のモデルを開発した。現在は、国内交流・国際交流の双方で交流を支援する方策をまとめている。先日は石川県教育センターにて交流学習の研修講師を担当する機会を得た。

10年前、金沢大学教育学部の学生だった私は、黒上晴夫助教授（当時）の下、こねっとプラン「いっしょに調べよう」の交流システムの開発に参加させていただいた。交流学習は10年取り組んでも魅力も課題も尽きないテーマのようである。

### 参考文献

- D.S.ライチェン, L.H.サルガニク(2006), キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして, 明石書店  
 稲垣忠, 内垣戸貴之, 黒上晴夫(2006), 学校間交流学習のための授業設計モデルの開発, 日本教育学雑誌 30(2), pp.103-112  
 授業設計モデルの詳細は「はじめてみよう学校間交流学習」<http://www.ina-lab.net/special/copo/> を参照されたい。

## A Basic Study about the Education use of Social Networking Site

Masuo Murai, Hitoshi Nakagawa, Miho Kawagishi,  
Yuki Kobayashi, Nobuhito Matsuno, Takahumi Kitada

### Abstract

Teachers have various problems in education. And teachers want to talk with somebody. However, teachers do not have the time to talk with somebody because they are busy. As a method that teachers can talk about at their convenience, there is network use. Therefore we performed a consciousness investigation of a method to solve these many problems. As a result, it became clear that E-mail, Bulletin Board and needs of Social Networking Site were high. Above all, many teachers use a Social Networking Site and want to ask Experts and Researchers for the solution of many problems.

### Study Purpose

About an effective application scene of the educational links use of SNS, we clarify the possibilities.

### Study Method

#### Investigation of teachers' consciousness

We get education use intentions and an answer about a concrete scene from the viewpoint of a teacher.

#### *A survey of teachers' consciousness*

Ask 152 teachers understanding SNS to some extent of the whole country. And we demand an answer about these investigations on the Web. In addition, they work in kindergarten, elementary school, junior high school, high school, school for physically handicapped and mentally retarded children, and Supervisors of school education.

#### *Contents of the investigation*

We conduct next investigation from the 5 viewpoint.

- About the teacher career and a kind of a school.
- About the use of computers.
- About presence of a problem in education and a partner to talk with.

- About communication on a network.
- About the possibility of educational use of SNS.

#### *Method of investigation*

We build a Web input system to enable a simple and easy answer and quick processing. And, for a teacher in question, we find out about URL of Web input system by an E-mail.

#### *Period of investigation*

From November 29 to December 12,2006.

#### **Method of assessment**

These are many questions of investigation content have by choice. Therefore I quantify every selected item and consider them. We perform qualitative assessment free writing content.

### Conclusion

We clearly could do five conclusions.

#### **Circumstances of the consciousness of teachers**

Teachers have the various subjects in education. And, they want to consult the other teachers and also the specialist outside the school.

#### **Way which consults the teacher and the specialist outside the school**

There are more than the E-mail and Bulletin Board many teachers who want to utilize SNS.

#### **Expectation value to SNS**

The expectation value of the teachers who have used SNS is very high.

#### **Education use of SNS**

Teachers think by using SNS that it is able to consult effectively about lesson, student guidance, information education, school management.

#### **Condition which can use SNS**

Teachers want to entrust the person outside the school with the management of SNS.

# 平成19年度 石川県教育工学研究会役員名簿

(順不同 敬称略)

【会 長】 岡部 昌樹 (金沢星稜大)

【副 会 長】 内田 正明 (夕日寺小学校) ◎村井万寿夫 (金沢星稜大) ◎加藤 隆弘 (金沢大)

【代 表 理 事】 西出 隆 中村 孝雄 紙谷 威  
山本 昌猷 清丸 亮一 谷内 敏夫  
藤井 昭久 北本 正明 押野 市男

【理 事】 [◎は常任理事]

(加賀地区) ◎荒谷 実 (加賀市教委) ◎吉田 博 (中海小) 下出 貴 (分校小)

菖蒲田英夫 (押野小)

(金沢地区) ◎三田村英明 (米丸小) ◎西田 政人 (菅原小) 宇都宮 博 (錦城養護)

南 千之 (鳴和中) ◎尾小山輝子 (盲学校) 山崎 副 (萩野台小)

山本 秀紀 (大徳中)

(能登地区) 坂井 善久 (小丸山小) ◎大森 俊彦 (高階小) 荒巻 雅博 (能登島中)

【運 営 委 員】 [○は研究委員]

(加賀地区) 谷口 一登 (犬丸小) 山崎 治 (館野小) 渡辺 直人 (東明小)

畠山 久雄 (錦城養護)

(金 沢) 奥野 豊夫 (三谷小) 中島 満子 (三馬小) 青江 弘義 (浅野川小)

升田 敦士 (兼六中) 坂井 直澄 (泉中) 浜坂 昌明 (紫錦台中)

山本 英喜 (北鳴中) 端崎 圭一 (金大附属中) 嶋 耕二 (長田中)

宮中 和久 (金沢伏見高) ○中野 淳子 (金大附幼) 樫田 豪利 (金大附属高)

畠 一馬 (金沢辰巳丘高) 島崎 徹 (二水高) ○濱田 美恵子 (扇台小)

(能登地区) 中西 英一 (羽咋小) 笹川 修栄 (鳥屋小) 山下 匡 (大屋小)

前 正人 (鹿島中) ○岩崎 京子 (徳田小) 松本 豊 (東湊小)

【事 務 局 長】 清水 和久 (県教育センター)

【事務局次長】 ○中條 敏江 (組織担当: 東明小) ○飯田 淳一 (企画担当: 大徳小)

○坂上 則子 (会報担当: 四十万小) ○正來 洋 (web担当: 額小)

【研 究 部 長】 ○細川都司恵 (夕日寺小)

【研究副部長】 ○山下 雅美 (金沢教育事務所)

【会 計】 事務局長兼務

【会 計 監 査】 西田 政人 (菅原小) 堀内 克之 (西南部小)

【日本教育工学協会役員】

(研究会理事) 岡部 昌樹

【顧 問】 伊東 平俊 柳田 勇 山崎 豊 吉田 貞介

【指 導 委 員】 太田 雅夫 小笠原喜康 金子 劭榮 黒上 晴夫 黒田 卓 坂元 昂

堀田 龍也 大野木裕明 水越 敏行 山西 潤一 山極 隆 吉崎 静夫

赤堀 侃司 鈴木 克明 清水 康敬 堀口 秀嗣 中川 一史

# 石川県教育工学研究会 会計報告

## 平成18年度決算

### 収入

科目	予算	決算	増減	備考
会員負担金	402,000	334,500	▲ 67,500	決算分は4月末日まで 3,000円×115人+半日3人1,500円
県補助金	400,000	400,000	0	
賛助会費	180,000	180,000	0	60,000×1社、30000×4社
雑収入	0	323	323	銀行利子
合計	982,000	914,823	▲ 67,177	

### 支出

科目	予算	決算	増減	備考	
補助対象経費	謝礼金	60,000	60,000	0	講演会謝金(講師代)
	旅費	210,000	210,000	0	全国大会(熊本大会)
	消耗品	30,000	29,132	868	発送用封筒、デジタルビデオテープ、DVD-R、タックシール
	印刷費	310,000	294,000	16,000	会員名簿、会報71,72号、研究紀要
	図書費	120,000	100,000	20,000	支部活動費、研究用図書、資料代
	事務連絡費	0	0	0	
	通信運搬費	100,000	81,618	18,382	会報、会員名簿、研究紀要郵送費
借上費	25,000	0	25,000	施設利用謝礼	
計	855,000	774,750	80,250		
補助対象外経費	賃金	60,000	60,000	0	事務局事務員(村井さん)
	組織加盟金	20,000	20,150	▲ 150	日本教育工学協会会費、送金手数料
	諸会合費	36,500	49,423	▲ 12,923	諸会合費(大会昼食費)
	web維持費	10,500	10,500	0	
計	127,000	140,073	▲ 13,073		
合計	982,000	914,823	67,177		

## 平成19年度予算

### 収入

科目	予算	決算	増減	備考
会員負担金	420,000	341,000	79,000	決算分は予想
県補助金	400,000	400,000	0	
賛助会費	180,000	180,000	0	60,000×1社、30,000×4社
雑収入	0	0	0	銀行利子
合計	1,000,000	921,000	79,000	

### 支出

科目	予算	決算	増減	備考	
補助対象経費	謝礼金	60,000	60,000	0	講演会謝金(講師代)
	旅費	210,000	210,000	0	全国大会(長野大会) 北陸大会(富山大会)
	消耗品	30,000	30,075	▲ 75	発送用封筒、デジタルビデオテープ、DVD-R、タックシール
	印刷費	320,000	291,900	28,100	会員名簿、会報73,74号、研究紀要
	図書費	120,000	100,000	20,000	支部活動費、研究用図書、資料代
	事務連絡費	0	0	0	
	通信運搬費	120,000	74,510	45,490	会報、会員名簿、研究紀要郵送費
借上費	45,000	10,000	35,000		
計	905,000	776,485	128,515		
補助対象外経費	賃金	60,000	60,000	0	事務局事務員(村井さん)
	上納金	20,000	20,120	▲ 120	日本教育工学協会会費、送金手数料
	諸会合費	15,000	38,805	▲ 23,805	諸会合費
計	95,000	118,925	▲ 23,925		
合計	1,000,000	895,410	104,590		

## 平成19年度 石川県教育工学研究会事業計画

事業	期 日	概 要
1 総 会  理 事 会	19年 5 月 27日(日)  20年 3 月 2 日(日)	平成19年度総会（於：金沢市教育プラザ富樫） ・平成18年度事業報告・決算報告 ・平成19年度事業計画・予算案 平成19年度理事会（於：金沢大学） ・平成19年度事業報告・決算中間報告 ・平成20年度事業計画・予算案 ・平成20年度役員案
2 研究事業	5月27日(日)  7月5日(木) 午後 7:00～ 8月25日(土) 午後 1:00～  11月16,17日(土) 12月1日(土) 12月8日(土) 午後 1:00～ 1月19日(土) 3月2日(日)	○講演会・学習会「授業研究の進め方」 会場：金沢市教育プラザ富樫 ○学習会「全国学力テスト分析会」 会場：金沢市教育プラザ富樫 ○夏の研究会「PISA 型読解力セミナー」 主催：金沢大学教育学部教育実践総合センター 共催：教育工学研究会：メディア教育振興会 ○第33回全日本教育工学研究協議会全国大会（千葉旭市） ○北陸三県教育工学研究大会福井大会 ○冬の研究会「国際理解教育セミナー」 会場：金沢市教育プラザ富樫 ○学習会「事務処理効率 UP ソフト活用研修会」 ○平成18年度石川県教育工学研究大会 会場：金沢大学
3 刊行事業	4月、6月、8月、10月、 12月、3月  7月、3月 3月	○研究会ニュース 年間を通じ当会 Web サイト <a href="http://i-kougaku.undo.jp/">http://i-kougaku.undo.jp/</a> にてニュースを掲載しています。(web サイト変更しました) ○会報（73号、74号、B5版、24頁、200部） ○第32号研究紀要（A4版、68頁、200部）

### 編 集 後 記

3月大会の講演、5月総会等をまとめた会報73号が無事完成しました。今回の会報では、研究部の新たな息吹を皆様に伝えようと考えました。会報でお伝えしきれなかった新しい動きは以下の URL でもご覧いただくことができます。

<http://i-kougaku.undo.jp/>

お忙しい中、原稿を依頼しました先生方、快くお引き受けくださり、ありがとうございました。

【会報担当】

### 会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入をお願いいたします。 年額 3,000 円

振込先 北國銀行 高尾支店 普通 110292  
石川県教育工学研究会 岡部 昌樹

#### 平成19年 7月17日発行

発行者 石川県教育工学研究会  
代表者 岡部昌樹  
事務局 〒920-1192 金沢市角間町  
金沢大学教育学部附属  
教育実践総合センター内  
TEL 264-5588 FAX 264-5589  
印刷所 ㈱小林太一印刷所  
TEL 238-5454 FAX 238-5453